うたたね

全訳注

次田香澄

講談社学術文庫

次田香澄（つぎた　かすみ）
1913年生れ。1936年東京大学文学部卒業。中世文学専攻。大東文化大学教授。文学博士。著書「（岩波文庫）玉葉和歌集」「（日本古典全書）とはずがたり」，共著「うたゝね・竹むきが記」「うたゝね本文および索引」など。

講談社学術文庫
定価240円

うたたね
次田香澄
昭和53年11月10日　第1刷発行

発行者　野間省一
発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽2—12—21　〒112
電話・東京(03)945—1111(大代表)
振替・東京8—3930
装　幀　蟹江征治
レイアウト　志賀紀子
印　刷　廣済堂印刷株式会社
製　本　有限会社中沢製本

© Takatada Imaizumi　1978
Printed in Japan

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

0195-582982-2253(0)　（術E）

うたたね

全訳注 次田香澄

講談社學術文庫

カナダ留学中、一九七七年客死した次男 年(たかる)への

ささやかなメモリーとして

はしがき

『うたたね』は、『十六夜日記』で知られる阿仏が、若い十八歳のころ、ある貴公子と短くも激しく燃えた愛の軌跡を、みずからたどった思い出の記である。

身分が違うため、また彼女があまりにうぶであったがために、わずか一年半ばかりの後、背かれてしまったと知ると、衝動的に髪を切り、雨の暗夜を出奔して尼寺に隠れる。しかし結局、彼女は一つ所に落ち着けず、各所を漂泊のすえ、養父の住む浜松まで旅し、またふたたび都へ帰るところでこの日記を結ぶ。

その間の心理の推移、舞台となる自然や環境の描写、殊に帰京の途次、にわかに雨が晴れて比叡の山にかかる白雲に、都の人を思うあたりは印象深い。短篇ながらすっきりとまとまった、おそらく現存する阿仏の最高の作である。純情でしかも情熱的な文学少女だった彼女のこの処女作は、特に若い人々の心をひきつけるに違いない。

一九七八年五月五日

次田香澄

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertor

目次

まえがき……3
凡例……7
一　月の前の傷心……13
二　恋の経過の回想……15
三　太秦詣でと法金剛院……21
四　彼の久々の便りと来訪……27
五　北の方の死、彼を庭に迎えた思い出……32
六　訪れ絶え出家を決意……38
七　自ら髪を切る……42
八　夜中出奔……48

九　雨の山路をさまよう……52
一〇　桂女に導かれる……54
一一　尼寺で出家を遂げる……59
一二　迷いの心を綴る……63
一三　冷やかな返事……68
一四　愛宕に移る、彼の車に会う……72
一五　旧居へ帰る……78
一六　遠江下向……82
一七　都を去る悲しみ……88
一八　洲俣の渡し……92
一九　鳴海・八橋・浜名……96
二〇　養父の家……102
二一　乳母の病を聞き帰京……108
二二　雪の不破の関……112
二三　帰京、乳母と再会……115
二四　巻末の述懐……120

系図……124
解説……126
(1) 阿仏の生涯と作品……127
(2) 『うたたね』の作者の問題……131
(3) 成立……134
(4) 構成と主題……137
(5) 表現・用語……138
(6) 諸本……145
(7) 校異……147
(8) 参考文献……153

凡例

一、本書は阿仏の日記文学『うたたね』について、各節ごとの本文・現代語訳・語釈・解説、および巻末に作者・作品等全体にわたる解説を収めたものである。

二、底本は、『うたたね』の写本のうち素姓・書写年代が比較的確実であり、善本と判断される御物『うたゝね』（東山御文庫本）を用いた。

三、本文はできるだけ底本に忠実に翻刻したが、諸本と対校してより正しいと判断した場合にはその本文に改め、底本の本文を「校異」に示した。

四、誤字・脱字の類は修正したものを本文としたが、明白な誤字以外は、参考のため底本の本文を校異として示した。本文に施された傍注も校異に移してある。

五、主な伝本との校異で参考となるものを本書の末尾にまとめて掲げた。なお「校異」に掲げた語句はすべて本文中に＊印を付しておいた。

六、繙読に便ならしめるため以下一一までの処置をとった。まず本文には濁点・句読点を添え、会話・引用の部分には「　」をつけた。

七、本文を歴史的仮名遣に統一するとともに、送り仮名の不足しているものを補った。また反復記号は現行の表記によって改めた。

八、適宜漢字を宛てて読みやすくしたが、当用漢字以外のものには読み仮名をつけた。
九、全篇を二四節に分割し、さらに各節のなかも小節として切れる所では改行を行った。
一〇、作品の筋を把握しやすいように、各節の冒頭に内容を簡約した見出しを掲げた。
一一、各節ごとの本文の後には、その部分の現代語訳を収めた。存疑の個所も一往意味が通じるように訳を試みた。
一二、できるだけ整定本文に忠実に訳を行ったが、行文の美しさを損わないように配慮したつもりである。
一三、語釈は、主として現代語訳では不十分な語句について、説明や解釈を行い、また出典や参考事項を記した。
一四、『うたたね』の作品としての鑑賞に資すべく、解説を設けて各節ごとの意味・特徴、全篇における地位、そのほか参考となる事柄を記した。
一五、本書の終りには『うたたね』の作者・作品ほか、全体にわたる解説を行い、便宜上本文の校異もここに収め、最後に主要な参考文献を掲げた。
一六、御物『うたゝね』（東山御文庫蔵）の閲覧及び写真作製と翻刻については、宮内庁侍従職の許可を受けた。侍従長入江相政氏よりいただいた格別の御好意に深謝申し上げたい。
また本文について御示教をいただいた山田忠雄氏にも感謝申し上げる次第である。
一七、本書は既刊『うたゝね・竹むきが記』（渡辺静子氏と共著、笠間書院刊）、『うたゝね本

文および索引』（酒井憲二氏と共著、笠間書院刊）の成果の上に成り立っているので、これらをも参照していただければ幸いである。

一八、本書の現代語訳及び考証は、主として次田秋津が担当した。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertor

うたたね

一　月の前の傷心

もの思ふことの慰むにはあらねども、寝ぬ夜の友とならひにける月の光待ち出でぬれば、例の妻戸おしあけて、ただひとり見出だしたる、荒れたる庭の秋の露、かこちがほなる虫の音も、物ごとに心を傷ましむるつまとなりければ、心に乱れおつる涙をおさへて、とばかり来しかた行くさきを思ひつづくるに、さもあさましくはかなかりける契りのほどを、などかくしも思ひ入れけんと、わが心のみぞかへすがへす恨めしかりける。

〈現代語訳〉

物思うことが慰むわけではないけれども、寝られぬ夜の友とすることが習いとなってしまった月の光を待ちつけて、いつものように妻戸を明けてひとり外をながめていると、……荒れた庭におく秋の露も、恨みがましく鳴く虫の声も、一つ一つが心を傷ませるいとぐちになってくるので、心のうちに乱れ落ちてくる涙をおさえて、しばしこれまでのこと、行く末のことを思いつづけると、いかにも情けなくはかなかったあの人との契りのほどを、なんで

またこのように一途に思い込んだのだろうと、わが心ばかりがかえすがえす恨めしく思われるのだった。

〈語釈〉

○**もの思ふこと**　愛人との恋愛に関していう。○**待ち出で**　待ち受けて会う、出てくるのを待つ。○**例の**　副詞。いつものように。上の「ならひにける」に呼応する。

○**妻戸**　開き戸で、両開きにする。寝殿や対屋の四隅にあり、出入り口となる。

○**見出だしたる**　このあとに「に」などを補って解釈する。○**荒れたる庭**　秋も深まって庭の草木が凋落してきたさまをいう。愛人との恋愛の状態を象徴している。

○**かこちがほ**　恨めしそうな様子。「虫の音」を修飾する慣用語。○**傷ましむる**　「しむ」は使役の助動詞、平安時代の口語を主流とする女流文学系統の文体ではほとんど用いられず、中世以後も文章語中に用いられたものである。

○**心に乱れおつる**　心の乱れにこぼれ落ちる、の意の用法で、「乱れ」が掛詞のようになっている。○**とばかり**　副詞。しばらくの間。

○**さも**　いかにも。程度の甚だしさを強調し、詠嘆していう。○**契りのほど**　愛人との交情の有様。「ほど」は時間の推移に伴って変化する様子・具合。

〈解説〉

自己を物語中の悲劇的ヒロインのように印象づけようとする登場のさせ方である。舞台装

置も、妻戸を細目にあけて月を見る趣、月のほか庭の露・虫と秋のあわれを添えるものがそろっている。

彼女の貴人との恋愛はこの春からのことであった（七節参照）が、『うたたね』の冒頭を晩秋のこととし「荒れたる庭の秋」と記しているのは、二人の間柄がか（枯・離）れがれの状態に近づいていたことを、季節に重ねて象徴させた用意があってのことである。この段でも更に「あさましくはかなかりける契り」と述懐している。

二　恋の経過の回想

夢うつつとも分きがたかりし宵の間より、関守のうち寝るほどをだに、いたくもたどらずなりにしにや。うちしきる夢の通ひ路は、一夜ばかりのとだえもあるまじきやうに慣らひにけるを、さるは月草のあだなる色を、かねて知らぬにしもあらざりしかど、いかに移りいかに染めける心にか、さもうちつけにあやにくなりし心迷ひには、「伏し柴の」とだに思ひ知らざりける。

やうやう色づきぬ。秋の風の憂き身に知らるる心ぞ、うたてく悲しきものなりけるを、おのづから頼むる宵はありしにもあらず、打ち過ぐる鐘の響きをつくづくと聞き

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertor